

山部赤人「春日野に登りて作れる歌」の特質

森

斌

はじめに

山部赤人は、万葉集第三期に属しているが、作品年次の知られるものが神亀元年の紀伊行幸の従駕歌から天平八年の吉野行幸の従駕歌である。従って、神亀から天平初期の専門歌人が赤人であったのであろう。ちなみに、歴史書には登場していないので、五位以下の身分の低い下級官吏でたあつたらしいが、行幸従駕や何らかの羈旅での作品が万葉集に残された。主には不尽山の歌（三・三二七、三二八）や、吉野讃歌（六・九二三―九二七）の創作等が著名である。また、赤人の評価は、勿論羈旅乃至従駕での創作に重点があるのであるが、少しく配慮したい歌がある。それは、全体が十九句からなる長歌と反歌とで構成された相聞歌の内容を示しながら巻三の雑歌に収められている歌である。

山部宿禰赤人の春日野に登りて作れる歌一首并せて短歌

春日を 春日の山の 高座の 三笠の山に 朝さらず
雲ゐたなびき 容鳥の 間なく数鳴く 雲居なす
心いさよひ その鳥の 片恋のみに 昼はも 日のこ
とごと 夜はも 夜のことごと 立ちてゐて 思ひそ
わがする 逢はぬ児ゆゑに（三七二）

反歌

高松の三笠の山に鳴く鳥の止めば継がる恋もするかも（三七三）

右に引用した春日野に登る長短二首を対象に、赤人の創作手法を配慮して歌の特質を考察したい。

一、「恋」の歌

春日野に登りて作れる歌は、不思議な作品である。赤人には珍しい「長歌の相聞」であり、また「野に登る」と題詞に記されている。かかる表面的な意味でも個性的なのであるが、はたして内容はどのようなのであろうか。

まず、清水克彦氏は、赤人の長歌を「見れば型」と「は型」の二つに大別して、この根底に作歌年代が意味すると考え、「具体的に言えば、赤人が東国、および伊予下向したのは、彼の作家活動の初期であり、彼は『見れば型』から『は型』へと移って行った⁽¹⁾」とする。その立場からは、春日野に登る歌は「は型」である。「見れば型」の代表としては、富士の歌（三・三二七）を、「は型」の代表として吉野賛歌（六・九二三）を、それぞれ取り上げる。また、赤人長歌の特徴を分析した小野寛氏は、赤人の長歌の平均句数を十九句として、万葉の長歌の平均句数を二十九句程として比較しているが、さらにその構成から赤人の長歌を四つの型を考えている⁽²⁾。それぞれは、「……は」型、「……に」型、「……見れば」型、「一旦終始型（二段）」と呼称するが、春日野に登る歌を一旦終始型に分類している。さらに、清水氏が「は型」とした春日野に登る

歌と分類の対象に選ばなかった敏馬浦を過ぎる時の歌（六・九四六）とを、小野氏は一旦終始型に一括分類している。

この一旦終始型の歌は、この二群共に赤人の歌では珍しい相聞歌の内容があり、なお恋歌の雰囲気までもがある。表現構造の類似がモチーフの近似ということに結びついていくが、これもまた偶然のことなのであろうか。

敏馬の浦を過ぎし時に、山部宿禰赤人の作れる歌
一首并せて短歌

御食向ふ 淡路の島に 直向ふ 敏馬の浦の 沖辺に
は 深海松採り 浦廻には 名告藻刈る 深海松の
見まく欲しけど 名告藻の 己が名惜しみ 間使も
遣らずてわれは 生けりともなし（九四六）

反歌

須磨の海人の塩焼衣の馴れなばか一日も君を忘れて思
はむ（九四七）

引用した十五句からなる長歌は、初句から第八句までが叙景であり、そこまでの叙述では二つの景物が提示されている。一つが沖の深海松、もう一つが浦廻の名告藻である。この深海松と名告藻が対句として次ぎに恋の嘆きの比喻となる。反歌では、「君」が登場しているが、この言葉は、男性を意味しているので女性に仮託した歌を意味する。長

歌では女性を対象に恋心を表白している。まず、全体の内容が恋歌と言うことで両歌群は一致する。次ぎに春日野に登る歌と等しいのは、初句から第八句までが叙景であり、第九句から雲と容鳥が対になって恋情の比喩に用いられているが、敏馬の浦を過ぎる歌も初句から第八句までが深海松と名告藻とが対句として提示して、さらに第九句からが恋心の比喩となって展開することである。

ちなみに恋の比喩と述べたが、赤人には相聞の部立に載る歌がない。歌は全て雑歌と挽歌である。その挽歌も伝説に素材した勝鹿真間娘子に対する巻三・四三一―四三三番のみであり、他の四十六首は雑歌である。雑歌といいながら相聞的な発想の歌が皆無かと言えば数は少なくとも存在している。春日野に登る歌もそうであるし、神龜三年の九月十五日、播磨国印南野に行幸の折りの歌であろうか、笠金村の作れる歌に続けて載せられた巻六・九三八番の反歌三首中の二首に、

印南野の浅茅押しなべさ寝る夜の日長くあれば家し偲はゆ（九四〇）

明石潟潮干の道を明日よりは下咲ましけむ家近づけば（九四二）

とあり、さらに辛荷の島を過ぎし時の歌（六・九四二）九

四五）の九四五番を除く三首も、相聞の発想でうたわれている。

味さはふ 妹が目離れて 敷栲の 枕も纏かず 桜皮纏き 作れる舟に 真梶貫き わが漕ぎ来れば 淡路の 野鳥も過ぎ 印南つま 辛荷の島の 島の際ゆ 吾家を見れば 青山の 其処とも見えず 漕ぎたむる 浦のことごと 行き隠る 島の崎々 隈も置かず 思ひそ吾が来る 旅の日長み（九四二）

反歌

玉藻刈る辛荷の島に鳥廻する鷯にしもあれや家思はざらむ（九四三）

鳥隠り我が漕ぎ来れば羨しかも大和に上る真熊野の船（九四四）

その他既に取り上げた敏馬を過ぎし時の歌（九四六、九四七）も相聞的であるが、巻八・一四二六番は、歌語に「恋ひ」が用いられても、対象が人になってない。その問題に関する限り、一旦終始型の長歌は、相聞の内容であり、なおも恋歌の雰囲気濃厚である。即ち、春日野に登る歌も敏馬の浦を過ぎし時の歌も恋の対象が「逢はぬ児」であり、「みぬめ（見ぬ女）」である。

そもそも赤人の歌語には「恋ふ」が少ない。春日野に登

る長歌の第十二句に「片恋」が使われ、反歌も「恋」が用いられている。まず赤人以外の片恋の歌について考えてみたい。

① 大夫や片恋せむと嘆けども醜の大夫なほ恋ひにけり
(二・一一七)

② ……ぬえ鳥の 片恋嬌「二に云はく、しつづ」 朝鳥
の「一に云はく、朝霧の」 通はす君が…… (二・一九六)

③ 橘の花散る里の霍公鳥片恋しつづ鳴く日しそ多き(八・一四七三)

④ 水潜る玉にまじれる磯貝の片恋のみに年は経につづ
(十一・二七九六)

⑤ 真日長く夢にも見えず絶えぬともわが片恋は止む時も
あらじ (十一・二八一五)

⑥ 相思はず君はいませど片恋にわれはそ恋ふる君が姿に
(十二・二九三三)

⑦ すべもなき片恋をすところのわが死ぬべきは夢に見えきや
(十二・三一一一)

⑧ 旅に去にし君しも継ぎて夢に見ゆ吾が片恋の繁ければ
かも (十七・三九二九)

引用した八首では、②の用例である人麻呂挽歌一九六番

に用いられている片恋に赤人の発想が似ている。この人麻呂歌は、明日香皇女の殯宮挽歌であり、皇女の夫がぬえ鳥の如く、朝に片恋して行ったり来たりする様子が引用した箇所である。また、鳥の片恋と言うことでは、③一四七三番もある。この歌では不如帰の片恋がうたわれているが、大伴旅人は神亀五年に大伴郎女を亡くしていた。京師から太宰の長官旅人に勅使石上堅魚が使わされ、その任が終わってから宴が催された時に詠まれた旅人の歌である。橘に郎女を、そして不如帰に旅人がそれぞれ譬えられている。他の六首は、人間の片恋を直接いうのである。また、男の片恋が①、女の片恋が⑤⑥⑦⑧であり、男女不明が③である。男女共に用いているが、女性の歌は、ひたむきな恋心の表現としてまとまっている。

人麻呂はぬえ鳥の片恋を夫の比喩に、旅人は不如帰の片恋をやはり夫の比喩に、それぞれ用いて亡き妻を偲ぶのである。少なくとも鳥の片恋の歌は三首中で二首が挽歌の内容である。春日野に登る歌は、対句表現に色濃く挽歌の雰囲気があるのであるが、鳥の片恋をうたっていることにも原因がありそうである。

次に赤人用いた「恋」の用例を反歌三七三番を除いて取り上げれば、

①明日香河川淀去らず立つ霧の思ひ過ぐべき恋にあらなくに(三・三二五)

②あしひきの山桜花日並べてかく咲きたらばいと恋ひめやも(八・一四二五)

③恋しければ形見にせむとわが屋戸に植ゑし藤波いま咲きにけり(八・一四七一)

ということになる。

赤人が恋う対象に選んだのは、①三二五番が旧都明日香である。その旧都に対する悲しみは、明日香川にいつもかかる霧の如く晴れない、と言う。慕情の強さが旧都への恋となる。慕情を恋の心情に重ね、さらに上句の叙景を恋の比喩として表現したのであるが、川霧が「川淀さらず」という箇所には赤人の自然を見る確かさと鋭敏な感性を認めた。まさしく川霧は、川一般に発生することが自明であっても、とりわけ川淀に止まりやすかったであろう。この歌は、自然の微細な機微に触れる一首である。

次に②一四二五番であるが、この歌は四首一組のものである。

春の野にすみれ摘みにと来しわれそ野をなつかしみ一夜寝にける(一四二四)

わが背子に見せむと思ひし梅の花それとも見えず雪の

降れば(一四二六)

明日よりは春菜摘まむと標めし野に昨日も今日も雪は降りつつ(一四二七)

一四二四番は、風狂と呼ぶ野への愛着が一夜の野宿になったのである。一四二六番は、女性の立場からの歌である。梅の花を降る雪と見る発想は、この時代の美意識である。

一四二七番は、雪に春の山菜摘みが拒まれた嘆きを歌うが、四首構成の纏めも試みている。初句「明日」第四句「昨日も今日も」とあり、期待した明日が、昨日と今日も期待はずれで、益々失望するのである。この一首は、風狂とまで見なされた野宿が前提にあることで更にむなしさがつのる。この様に期待と失望の連続の中で、桜がうたわれた。山桜を恋うるのは、儂い一生で在るが故に恋い焦がれるのである、とする。桜花がうたかたの存在であることで、むしろ桜花が限らない魅力になるのである。それを日々咲くならば、と仮定の型で問うが、歌の発想は額田王に返歌した大海人皇子の、「紫草のにはへる妹を憎くあらば」(二二)と言ひ、下句で何で恋などしようか、とうたう発想に同じである。

「日並べてかく咲きたら」といい、その仮定が成立しないのであるが故に、即ちはかない花の命で散るから、思い

焦がれるのである。花に人を恋うる心情を重ねている赤人の美意識がそこにある。

③一四七一番は、不如帰の鳴き声を恋うる歌であり、それは藤の咲く時期と重なる。不如帰と藤の組み合わせでは、次の例がある。

藤波の散らまく惜しみ霍公鳥今城の岳を鳴きて越ゆなり
(十・一九四四)

霍公鳥来鳴き響す岡辺なる藤波見には君は来じとや
(十・一九九二)

不如帰は、卯の花や橘がその組み合わせとしては一般的である。しかし、藤波と組み合わせたところに赤人の自賛が在ったかも知れない。類型と言っても決して単純な踏襲に止まらない才覚と努力がそこにある。

「恋」と言う赤人が用いた詩語を見てきた時、彼は春日野に登る歌を除いてその対象を女性或いは人間にすることがない。春日野に登る歌は、長歌「片恋」の対象が「逢はぬ児」であり、反歌「恋」の対象もやはり女性であるから、赤人の歌では、正面から人に対する恋情表現を試みた例外的な歌と言うことになる。

やはり春日野に登る歌は、赤人の作品でまことに珍しい内容があった。即ち、歌語にある恋乃至片恋の対象を女性

としていることから形式上からも正真正銘の恋歌である。ちなみに、長歌と反歌で正面から「逢はぬ児」を対象とした、さらに挽歌でもないのに鳥の片恋を比喩に用いた作品である。また、敏馬を過ぎし時の歌も、春日野に登る歌と同様に赤人の数少ない恋歌である。

二、挽歌的発想について

春日野に登る長歌は、「春日を 春日の山の」と冒頭が始まっていた。初句に「春日を」が用いられているが、「春がすみ 春日の里の」(三・四〇七)、「春がすみ 春日山に」(十・一八四三)、「春がすみ たつ春日野を」(十・一八八二)等の例からすれば、春日にかかる唯一の枕詞となる。春霞も春という季節に基づく霞なのであるが、春日という春の季節を踏まえていることは、この長歌の根底である。即ち、春日野の春がこの歌の背景にあるという意味である。春日山と霞の組み合わせは五首あり、そこには春日に霞む春日山という景が一般的であった。霞を登場させることなく、「春日を」と歌い出したのは、赤人の創意であった。明るい春の日差しと春日野の華やいだ雰囲気とがこの歌の冒頭なのである。ぼんやりとした、眺望の開けない、鬱陶しい、と言った雰囲気とは異質な景物に春日野が

なっている。

次に、「高座の 三笠の山」と風景の焦点が絞られていく。大から小へと視点が狭められていくが、こども三笠の枕詞に「高座の」を用いたのは赤人の創意である。春日で季節を、そして華やいだ雰囲気を表現して、さらにその春日野の背景として三笠山が登場する。第五句と第六句は、「朝さらず 雲ゐたなびき」という早朝の情景になる。続いて第七句と第八句は「容鳥の 間なく数鳴く」と言うことになり、春日野から三笠山と焦点が絞られた景がここで早朝の雲と鳥という二つ情景に展開して長歌の前段が終わる。早朝には山に雲のかかりやすいのが当然日常的な感性から知っていたのであろうし、鳥も夜が明ける頃から活発に餌を求め、また求愛のために鳴く。「容鳥」が郭公のこととすれば、若葉青葉も照り映えてくる晩春のころが適当な季節になるのであろうか。まさしく春山には雲がかかり、一方しばなく鳥の声が満ちていたがと考えてよい。ところが、「容鳥の 間なく数鳴く」という表現は、万葉集に三例あるが、春日野に登る歌を除いて用例を示すと次の如くである。

貌鳥の間無く数鳴く春の野の草根の繁き恋もするかも

(十・一八九八)

……山傍には 桜花散り 貌鳥の 間なくしば鳴く……
(十七・三九七三)

一八九八番は、「鳥に寄せたる」という景物詠である。草が生い茂ることと貌鳥がしきりに鳴くことが同質に扱われているのが「繁き恋」なのである。いやはやすさまじいばかりの鳥の鳴き声がそこに展開している。卷十七の歌は、大伴池主の作であり、家持に贈答されている。長歌では娘子達が家持のことを心乱して待っていることを間接に暗示させ、恋心に展開させている。卷十、同十七の用例などは、赤人の作品をむしろ知って、或いは伝統表現として学んで作られているのではなからうか。とにかくすさまじいまでの恋心が連想される言葉である。

赤人は、自然の景物である朝の三笠山に佇む雲と相手を一途に求めしば鳴く容鳥という二つの景を比喻にして、恋する心情のあり方に結びつけた。かかる景による心情の描写は、赤人を叙景詩人と呼ばしめるのであるが、一般的には恋情の表現に向かわず孤愁の表現に個性を発揮している。

さて、春日野に登る歌の第九句からは後段が始まる。ここからは叙景の雰囲気とは一変してくる。即ち、「雲居なす 心いさよひ その鳥の 片恋のみに」と言う四句は、柿本人麻呂が明日香皇女の殯宮挽歌で「ぬえ鳥の 片恋つ

ま〔一に云はく、しつづ〕 朝鳥の〔一に云はく、朝霧の〕
通はす君が〔二・一九六〕と詠んだ一節が連想される。

第十三句からは、「昼はも 日のことごと 夜はも 夜の
ことごと」とは、額田王が天智天皇葬送の時に詠んだ「夜
はも 夜のことごと 昼はも 日のことごと」〔二・一五
五〕や置始東人が弓削皇子薨去に作った挽歌に「昼はも
日のことごと 夜はも 夜のことごと」〔二・二〇四〕と
ある。額田王の例とは、昼と夜が逆になっているが、東人
の例とは、全く同文であり、その歌作の厳密な前後は不明
と言わなければならないが、恐らく東人の作歌時期が赤人
より早かったのであるまいか。また、人麻呂の挽歌にはさ
すがに赤人や東人の例と単純に比較できない具象性が伴う
「昼はも うらさび暮らし 夜はも 息づき明し」〔二・二
一〇〕の表現が見られる。

そもそも雲も鳥も挽歌に多用される素材である。試みに
巻二と巻三の挽歌から短歌のみ参考の一部を取り上げれば
次の如くである。

神山にたなびく雲の青雲の星離れ行き月を離れて〔二・

一六一〕

鳥に宮上の池なる放ち鳥荒びな行きそ君いまさずとも

〔二・一七二〕

直の逢ひは逢ひかつましじ石川に雲立ち渡れ見つつ偲
はむ〔二・二二五〕

ももづたふ磐余の池に鳴く鴨を今日のみ見てや雲隠り
なむ〔三・四一六〕

朝鳥の音のみし泣かむ吾妹子に今また更に逢ふよしを
無み〔三・四八三〕

大津皇子の辞世歌四一六番は、鳥の鴨と死の敬語表現と
して雲を登場させている。引用した歌等をさらに参考にし
た時、鳥と雲の組み合わせは挽歌表現と同質としても理解
されるのである。この恋情と挽歌との接近は、赤人の春日
野に登る歌の原点でもあった。

春日野に登る歌は、恋歌である。ところが、恋心を示す
叙情の中核が挽歌的発想である。いくら恋心と挽歌とが基
本的な心情で一致するものがあるといっても、あまりに行
きすぎた一致はどう説明されるのであろうか。

奈良公俊氏は、春日野に登る長歌が意図的な試みであつ
たとして、「赤人は、『挽歌的』な表現を用いることによつ
て長歌後半部の『片恋』の悲傷を形成しようとしたもの」と
言う判断である。⁽³⁾ところが、鳥の片恋それ自体が挽歌
的なのであるからさらに挽歌的というのであれば、もう本
質が挽歌と言うことではないか。即ち、「逢はぬ思」とは、

既にこの世から去ってしまったたり、或いは地方に赴任した時に任地で親しくなつたか、はたまたそれに近い様な永久の離別を前提にするなり、いわゆる挽歌の対象にすべき存在を考えるべきではないか。即ち、挽歌の対象になり得る女性か、人麻呂の石見相聞歌の対象になった女性の存在である。

一方、村山出氏は、中国文学とりわけ『玉台新詠』の詩を踏まえ、春思の情緒を表現したとして、赤人が体験的な恋を表現したものでなく、「恋歌を人々に示すのに絶好な場所⁽⁴⁾で、赤人は虚構の恋の嘆きを披露した」とする。

いずれの考えが正しいにせよ、反歌は激しい思慕の情を示している。「鳴く鳥の止めば継がる恋もするかも」とは、長歌の表現で中核をなす対句表現の雲を切り捨て、鳥に焦点を絞つてうたったものである。近代の注釈書は、沢瀉久孝氏が評価しているが、概ね評価が低いようで、土屋文明氏の如く実景を序とした技法を認めながら、「模擬恋愛」を動機とするという虚構的な動機が働いている、とするからである⁽⁵⁾。

恋歌と言う共通のものがあるが、春日野に登る歌と敏馬を過ぎる歌とは、感情の根本で異質なものである。即ち、相聞歌で恋の気持ちとうたっていると言う共通するものが

ありながら、敏馬を過ぎる時の歌には挽歌表現への接近が試みられていない。それは、対句表現の素材として深海松と名告藻という海草が恋歌に用いられても、挽歌の素材に成りにくいからでもある。藻とは、妖艶な女性の姿態美の比喩にはよく用いられ、現世での華やかな美しさの表現である。やはりこの挽歌的な発想の根本には、宴席歌、独詠歌と言った創作目的、或いは場の相違があるのではあるまいか。次節では、虚構について配慮しつつ、歌の特質についてさらに考察する。

三、「山に登りて作れる歌」

山部赤人には、「山に登り」と題詞に記した歌が二首ある。「神岳に登りて」(三・三三四)、「春日野に登りて」(三・三七二)であるが、万葉集では他の用例としては、次の如くである。

①筑波岳に登りて、丹比真人国人の作れる歌一首并せて短歌(三・三八二)

②筑波山に登らざりしことを惜しめる歌一首(八・一四九七)

③筑波山に登りて月を詠める一首(九・一七二二)

④検税使大伴卿の、筑波に登りし時の歌一首并せて短歌

(九・一七五三―一七五四)

⑤筑波山に登れる歌一首并せて短歌(九・一七五七―一七五八)

⑥筑波嶺に登りて・歌会をせし日に作れる歌一首并せて短歌(九・一七五九、一七六〇)

以上の用例から知られることは、万葉の登山歌は赤人以外全てが筑波山に關わっていることである。まず、①丹比真人国人の歌は、天平時代の人で赤人よりは一時代若いようである。彼の長歌は、筑波の山を冬だからと言って国見をしないで行つてしまつたら益々悲しいので雪消の道を難渋して登つた、とうたう。③が作者不明であるが、②④⑤⑥は高橋虫麻呂歌集の歌である。②虫麻呂の筑波山に登らないことを惜しむ歌(一四九七)では、不如婦が山彦を響かせて鳴いているのを聞けない、と惜しんでいる。⑥長歌群(一七五九―一七六〇)は、筑波山で行われる歌垣の日に男女が歌をかけあつて、妻も人妻も、我も他人も言葉をかけよ、神のお許しがあるのだから、とうたう。その筑波とは、歌垣の行われることで著名な場所である。③山に登り月を眺めて作る歌(一七一二)と言う作者不明のもあるが、筑波山に登る歌の基本は、筑波山で行われた歌垣の場であることに由来する。その筑波山とは、常陸国風土記に、

山の形容として二上であること、春秋に男女が飲食を伴う遊樂をすること、その時に謡われる民謡が沢山あること、さらに諺として「筑波峰の会に娉の財を得ざれば、兒女とせずといへり」とある。男体山(八七〇メートル)、女体山(八七六メートル)の二峰からなる古代の信仰の山でもある。古代においては、双児峰は越中の二上山も含めて聖なる場所であり、さらに筑波を有名にしたのが歌垣である。万葉の時代から登山という言葉が適切な唯一の山である。

勿論、登山といつても今日的なスポーツの性格が皆無であるのは当然としても、そこには遊樂を目的としている雅な宴の場が想定されるにせよ、やはり基本は信仰に結びつくし、加えてそこには月見の歌もあるが、「夜渡る月の入らまく惜しも」(一七一二)とうたうところに「月見」を主題とする登山ではなく、むしろ「宴」「歌垣」の終焉といった目的に付随した雅な遊藝の趣がある。

筑波に登る歌で注目したいのは、⑤に取り上げた虫麻呂作の長歌と反歌である。題詞は引用したので本文のみ示せば、次の通りである。

草枕 旅の憂へを 慰もる 事もありやと 筑波嶺に
登りて見れば 尾花ちる 師付の田居に 雁がねも
寒く来鳴きぬ 新治の 鳥羽の淡海も 秋風に 白

波立ちぬ 筑波嶺の よけくを見れば 長きけに 思
ひ積み来し 憂へは息みぬ（一七五七）

反歌

筑波嶺の裾廻の田井に秋田刈る妹がり遣らむ黄葉手折
らな（一七五八）

長歌は、旅の憂いを癒すために登山した、とある。さらに山から見る風景によつて物思いも止んだ、という長歌の心情がさらに展開して、反歌では「秋田刈る妹」が登場している。この妹も季節に結びつくし、また眺望の対象であった秋の田と言う連想を働かせたのであつて、偶然すぎて想像上の女性であろう。しかし、この山に登り、精神が解放され、さらに空想の女性までもが歌われている事は、赤人の春日野に登る歌との比較が試みられてよい。

一方、筑波山と対比される東国の代表的な山に富士山がある。赤人（三・三一七、三一八）と高橋虫麻呂（三・三一九～三二二）の長歌群は、どちらも叙景歌であり、彼らが富士を旅中に見たという体験を踏まえた賛歌となつている。「語り継ぎ 言ひ継ぎ行かむ 不尽の高嶺は」（三一九）や「駿河なる 不尽の高嶺は 見れど飽かぬかも」（三一九）と言う長歌の結束部は、伝統の賛歌的表現である。ところが、赤人と虫麻呂を除く万葉例六首は、全てが短歌で

相聞歌でもある。

吾妹子に逢ふ縁を無み駿河なる不尽の高嶺の燃えつつ
かあらむ（十一・二六九五）

妹が名もわが名も立たば惜しみこそ不士の高嶺の燃え
つつ渡れ（十一・二六九七）

天の原富士の柴山木の暗の時移りなば逢はずかもあら
む（十四・三三五五）

富士の嶺のいや遠長き山路をも妹がりとはば日に及ば
ず来ぬ（十四・三三五六）

霞ある富士の山びにわが来なば何方向きてか妹が嘆か
む（十四・三三五七）

さ寝らくは玉の緒ばかり恋ふらくは富士の高嶺の鳴る
沢の如（十四・三三三八）

引用した全てが作者未詳の歌であるが、東歌と卷十一とは、少しく内容に隔たりがありそうである。卷十一の二首は、人知れない恋の思いを噴火する富士のイメージで表現している。人知れず密かに心で燃えよというのである。東歌は、その土地に生活する視点から詠んでいるのであつて、火柱の立つ富士という固定観念は見られない。しかし、共通するのは、恋歌に登場していることである。山が信仰と結びつくことは、富士山、白山、立山、御岳等が参考にと

なる。しかし、ある一面であつても万葉集では筑波の登山歌、春日野の登山歌が恋歌に利用されている。

一方春日野とは、野遊びの場所でもあつた。卷十には、次の歌が一括して載っている。

煙を詠める

春日野に煙立つ見ゆ少女らし春野のうはぎ採みて煮らしも（一八七九）

野遊

春日野の浅茅が上に思ふどち遊ぶ今日の日忘らえめやも（一八八〇）

春霞立つ春日野を行き帰り我は相見むいや毎年（一八八一）

春の野に心展べむと思ふどち来し今日の日は暮れずもあらぬか（一八八二）

ももしきの大宮人は暇あれや梅を挿頭してここに集へる（一八八三）

春日野とは春に人々が集う行楽地であつたことが知られる。春の若草摘みが行われ、羹を煮る煙が立ちのぼり、野遊びが行われ、人との出会いがあり、野で心を解放し、大宮人も挙つてやつて来るのが春日野であつた。とすれば、春日山、三笠山も同様な野遊び、若菜摘み等で人々が集ま

り、遊園する土地である。

「春日を 春日の山の」という長歌の冒頭は、「春日を」という枕詞がこの一例だけというばかりか、春という季節と、山であれば筑波の如く歌垣を、野であれば野遊びを連想する。叙情の中核である結末部の三句は、「立ちてゐて思ひそわがする 逢はぬ児ゆゑに」とあるのは、この歌が相聞の内容であることを如実に示している。

このことは、春日野が東国筑波の中央版であることを暗示しているのであるまいか。万葉集から「春日野」をうたつている例は、相聞歌が圧倒的である。

春日野に粟蒔けりせば鹿待ちに繼ぎて行かましを社し怨む（三・四〇五）

春日野の山辺の道を恐なく通ひし君が見えぬころかも（四・五一八）

春日野に朝ある雲のしくしくに吾は恋ひまざる月に日に異に（四・六九八）

見渡せば春日の野辺に立つ霞見まくの欲しき君が姿か（十・一九二三）

春日野の浅茅が原におくれ居て時とても無しわが恋ふらくは（十二・三一九六）

春日野とは、三笠山、香山、花山等を春日山といふので

あるからそれらの山を背景にした野である。今でも春日大社などもあつて鬱蒼とした原生林も残されている。野でありながら、「登」というのであるから、そこには山と同様の発想があつたはずである。野に登るとは、春日野の山に登るということになる。それは、長歌と反歌に「高座の三笠の山」を登場させるのである。春日野と同様に三笠の山も恋歌に多く登場する。とりわけ雲と山との組み合わせとしては、

君が着る三笠の山に居る雲の立てば継がる恋もする
かも（十一・二六七五）

春日なる三笠の山にゐる雲を出で見るごとに君をしそ
思ふ（十二・三三〇九）

などがある。三笠の山は、また月を主題にしても、
待ちかてにわがする月は妹が着る三笠の山に隠りてあ
りけり（六・九八七）

などは、笠を着るところから妹を連想させている。
この様に春日野に登る歌が赤人の典型的な恋歌であるこ
とが確認できる。ところが、相聞の部に入れなかった事情
として、つまりこの歌は、春日野で行われた何らかの公的
な行事とする清水克彦氏や、春日野における宴席で居合わ
せた貴族に披露した、とする村山出氏の考えもある。貴

族が集う宴席での歌であれば、雑歌の範疇になるのかも知れない。赤人は「神岳に登り」とする歌があつた。

神岳に登りて山部宿祢赤人の作れる歌一首 并せ
て短歌

三諸の 神名備山に 五百枝さし 繁に生ひたる つ
がの木の いや継ぎ継ぎの 玉かづら 絶ゆることな
く ありつつも 止まず通はむ 明日香の 旧き京師
は 山高み 河雄大し 春の日は 山し見がほし 秋
の夜は 河し清けし 朝雲に 鶴は乱れ 夕霧に 蝦
はさわく 見るごとに 哭のみし泣かゆ 古思へば

（三・三三四）

反歌

明日香河川淀さらず立つ霧の思ひ過ぐべき恋にあらな
くに（三・三三五）

赤人には、「恋」という歌語が少ない。そのことと赤人
が万葉集に相聞歌を残さなかったことは直接関わりがな
いであろうが、一般的には従駕などでも恋歌の発想を笠
金村などは取り入れている。赤人も同時代に宮廷歌人の例
外ではなかったはずである。先ず反歌に「恋」が春日野に
登る歌と同様に用いられていることが注目される。次に
賛歌としての「やすみしし 吾が大王」と言った特別に皇

室や、天皇賛美した言葉が見あたらないとか、そして、題詞に「神岳に登り」とあるが、事実として神聖な岳に登ったのであろうとか、等が問題になりそうである。

さて、全体が二十五句より成る長歌であるが、第十句までは主題の「明日香の 古き京師は」を導くための導入になっている。この導入部でしきりに強調していることは、第六句「いや継ぎ継ぎに」、第八句「絶ゆることなく」、第十句「止まず通はむ」ということは、繰り返し繰り返し、即ち継続することである。この明日香は、山が高く、川が雄大であると言う。この自然の誉め言葉は、京としての繁栄と反比例なのである。国破れたから、或いは遷都したから山と川とが自然を回復するのである。更に山と川とが対句の根本になって叙述が展開する。「春の日は 山し見がほし」に対応して「秋の夜は 河し清けし」と、そして「朝雲に 鶴は乱れ」に対応して「夕霧に 河蝦はさわく」と描写は進展する。「見がほし」「清けし」は、誉め言葉であるが、「乱れ」「さわく」も同様な表現と考えられる。乱れるも騒ぐも動作を伴っていて、そのことが自然の持つ力強い生命力なのであり、逆に京としての繁栄が鶴と河蝦に代表された生命に取って代わられたのである。「古思へば」とは、過去の繁栄を心に染み入って感じることである。こ

の感情が反歌では、目の前の霧が姿を隠して見せなくさせることを、恋の姿に理解したのである。

春日野に登る歌は、そもそも野に登る事に対する疑問もある。沢瀉久孝氏は、「野といふ言葉が丘をもこめたものである」と述べ、中西進氏は、山沿いの傾斜地を言い、「吉野」をその例として説明する。神岳に登る歌では、恋の感情と古を思う心情とが重なり合っていた。春日野に登る歌では前述した如く、山（春日野）に登って生じた孤愁が嘗ての恋人を想い出し恋愛の感情に重なった。また、長歌でありながらどちらも明瞭に皇室賛美に結びつく表現がないこと、表現の中核が共に対句で展開していることは、共通する事柄である。

ところが、これらの歌を比較する時、恋の感情が古を思う感情に重なるのであって、恋の感情そのものではないというのが神岳に登る歌である。春日野に登る歌は、男女の恋をうたうもので、赤人の歌語「恋」の用例でも例外と言うことになる。しかも、神岳に登る歌に無くて春日野に登る歌にある根本的な相違とは、挽歌的な表現の存在にある。そもそも恋歌が長歌であることも例外的である。わざわざ恋の気持ちを長歌でうたうのは何故であろうか。このことは最初から恋愛と結びつかない宴席や、何らかの公的な

場で披露されたことが原因であらうか。はたまた偶々個人的な感情に基づく創作でありながら、大作をものしてしまふ場合もあるかも知れない。しかし、ここで配慮すべき事が挽歌への接近である。

村山出氏は、「逢はぬ児」が特定の女性でないとして、「春思の情緒を表現しようとした創作である」として宮廷での『玉台新詠』の情詩の志向を指摘している。⁽⁸⁾恋歌への接近という点からは、春愁秋思と言った情緒が大事なのかも知れないが、春日野に登る歌は、極めて「逢はぬ児」が挽歌的に描かれている。虚構の嘆きと言うよりも体験的な恋の嘆きをこの長歌に認めても良いのであるまいか。

筑波に登る歌に、山に登るのが心の鬱情を晴らすもので、山から見た眺望で心情の解放が実現した、とうたった高橋虫麻呂歌（一七五七、一七五八）がいた。その解放された心情が反歌では写真から連想が働き、想像の女性までも誕生させていた。春日野に登る歌も女性が登場していて、その存在が議論の対象である。全く春愁と言う主題の作歌のための創作的な女性であるために、春日野の歌であればど中核をなす挽歌的な対句表現にこだわるのであらうか。

一人静かに春日野に登り空を見上げる。雲が見ながら、容鳥の嘯りに耳を傾けた時、雲と鳥と言うまさしく挽歌の

契機になる素材から、赤人は「逢はぬ児」を想い出した。益々思慕がついつて来たために、この春日野に登る歌が創作されたのであるまいか。ここには春陽、集団、共感ということよりも、春愁、孤独、そして独詠という側面で理解すべき赤人が居る、と私は考える。「逢はぬ児」とは、挽歌或いは永久の別れを前提にした女性だったと言うことである。

結 び

春日野に登る歌は、山部赤人の作品で最も恋歌らしい作品であり、類似した作品が他に見られない。即ち、赤人が相聞歌を作ることなく、行幸従駕や羈旅の作品に相聞的な香りの作品が見られる程度であるところから、この作品の独自性は、さらに明確になる。その意味からもうしてこのような例外作品が誕生したのであらうか、その創作事情が分かれば良いのであるが、今のところよく分からないのが事実である。

さて、摩訶不思議な魅力があるのは、対句表現の巧みであることも原因するのであらうが、恋の感情表現に挽歌の発想を強く意識した表現を試みていることにもある。西宮一民氏は人麻呂の石見相聞歌の関連を指摘する。⁽⁹⁾風土を

踏まえた前半の景を序として心情の展開がなされているからであろうが、いつも冷静で客観的な赤人が激しい恋の心情を鳥に焦点をあてた反歌などは、もっと評価されてよい作品に昇華している。

さらに春愁の歌の系譜としては、大伴家持の三絶（十九・四二九〇～四二九二）にも繋がっていくのであろうが、とにかく今後登山歌の視点からも考察されなければならない。春日野に登った赤人は、ひとり物思いに沈んだ。周りが華やかで、容鳥の囀りが続けば続くほど、赤人に思われてならないのは、逢わない子のことであつた。

〈注〉

- (1) 「赤人における叙景形式の変遷―仮称『原赤人集』の構造から―」〔万葉〕九五号
- (2) 「山部赤人の長歌の構成」〔駒沢国文〕十八号
- (3) 「山部赤人私記―三七二番長歌の作品性とその意義―」〔成蹊国文〕二四号
- (4) 「山部赤人の恋―春思歌の成立―」〔北海道大学国語国文学研究〕七六号
- (5) 沢瀉氏『万葉集注釈第三卷』 三七三番考
土屋氏『万葉集私注』 三七三番作意
- (6) 「逢はぬ児ゆゑに」〔短歌〕第三四卷四号

(7) 沢瀉氏『万葉集注釈』（卷三） 三七七頁

(8) 中西氏『古典鑑賞万葉の長歌（上）』 一六九～一七〇頁
注4に同じ。

(9) 『万葉集全注第三卷』 三七二考 二六〇頁